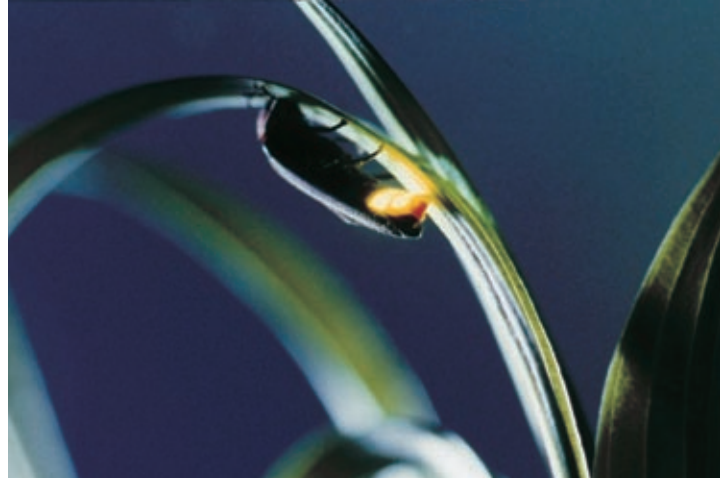


水辺の 生物



ゲンジボタル (源氏蛍)

コウチュウ目ホタル科

写真提供：鏗山英次氏

校閲：小西正泰氏

ゲンジボタルは体長 10~20mm、淡赤色の前胸に黒の十字形の紋があり、腹部、前胸の一部を除いて黒色である。オスは腹節末端の 2 節、メスは 1 節に淡黄色の発光器を備え、頭部にはよく発達した複眼を備えている。成虫は 5 月下旬から 7 月上旬にかけて発生し、日没後、オスはメスの周りでさまざまなパターンの光を放ち、光による誘示行動を通して交尾に至る。交尾後のメスは、水辺のコケなどに 500~1000 個の卵を産みつける。卵は約 30 日で孵化し、体長 2mm 前後の幼虫となり、水中でカワニナを食べながら成長し、5~6 回脱皮して、体長 20~30mm の終齢幼虫となる。終齢幼虫は、翌年の 4~5 月中旬、岸に這い上がり、土の中で蛹部屋(土まゆ)をつくる。およそ 1 か月半後に羽化し、地上に現れて飛びたつ。成虫は夜露以外は何も食べずに短い一生を終える。

世界には約 2000 種のホタルが知られているが、幼虫が水生(淡水生巻貝を食べる)と判明しているのは、わずか 10 種に満たない。ゲンジボタルは優れた自然環境にしか生息できないこと、学術的にも貴重なことから、多産地は国の特別天然記念物(1 か所)、天然記念物(9 か所)に指定されている。国の法律でホタルを保護する事例は、外国には見られないという。

ホタルは昔から日本の夏の風物詩として親しまれ、ホタルというと、ゲンジボタルかヘイケボタルを指すことが多い。ゲンジはきれいな流水にすみ、ヘイケは水田などの止水にすんでいる。ホタルは現存する日本最古の歌集『万葉集』の時代から、多くの詩歌、俳句、文学に登場し、靈魂にたとえられることも多い。江戸時代にはホタル狩りを楽しみ、麦わらで編んだ虫かごやホタルブクロ(キキョウ科の多年草)の花の中のホタルの光を觀賞した。初夏の夕暮れから点滅する幻想的なホタルの光は、今でも日本人の心を惹きつけてやまない。

ホタルは、きれいな清流のシンボルであり、近年、水辺環境の悪化によって消えゆくホタルを呼びもどそうと、全国各地で保全・再生活動が活発に行われ、ホタル観察会や觀賞会が開催されている。これほど日本人を夢中にさせる昆虫は、珍しいのではなからうか。

参考文献：『日本動物大百科 10 昆虫Ⅲ』日高敏隆監修 平凡社 1998年

『日本の天然記念物 2 動物Ⅱ・天然保護区域』加藤陸奥雄・沼田眞編集 講談社 1984年

『虫と人と本と』小西正泰著 創森社 2007年

『ホタル百科』東京ゲンジボタル研究会 丸善 2004年

これまでに紹介した「水辺の生物」のうち主なものを水資源機構ホームページに掲載しています
(トップページ右側「水辺の生物」をクリック)